

## 生体反応における ATP の 役割を解明した科学者 リップマンの詩と真実

評者 江橋節郎

生化学の黄金時代  
丸山 工作 著  
四六判 244 ページ  
岩波書店 1900 円 (消費税込み)



この書は、つきつめていえば、その華やかな題名や装丁にはいささか似つかわしくないフリッツ・リップマンの伝記である。それは決してありきたりの回想録でもなく、正確な年代記でもない。リップマンをめぐる生化学者が展開する万華鏡であり、アネクドートのオムニバスといったものである。ある章を拾い読みすれば、リップマンとは縁のない話かと思われよう。しかし、読み終わってもう一度通読すれば、それは意外とリップマンの真髓に触れているのである。

丸山さんはこれまでにも、科学者のユニークな伝記を次々とものされたが、本書はそれとは全く類を異にする。丸山さんにとって新しい試みであるばかりでなく、この種の書として新機軸を産み出したものといつてよからう。

リップマンの最大の業績は、複雑極まりない生体反応が ATP という一種類の通貨で取り引きされることを明快に解き明かしたことである。この驚くべき事実が、1つの思想としてリップマンという1人の人間に結実したことは、ある意味で奇跡といえるかもしれない。しかし天才は忽然と生れるもの

ではない。リップマンがこの想念に到達せざるを得なかったいささかは、1つのドラマであり、本書の白眉である。

ノーベル賞受賞の対象となったコエンザイム A という補酵素の発見は、リップマンが一流の研究者であることの証明ではあるが、この控え目ではにかみ屋の天才を格別権威づけるものでもなかった(事実、リップマン先生は、引越の際、ノーベル賞のメダルを紛失してしまったのである)。もっとも、リップマンは見かけよりは器用な面があって、四つ葉のクローバーを見つける「天才」をもっていた。この伝に従って小太刀の冴えを見せたことも一度や二度ではない。瘦身葉ジニトロフェニールにまつわる空騒ぎなど、この書における楽しいエピソードである。

リップマンはよく学問の詩人といわれるが、この「詩人」という言葉は、恐らくリップマンに最もふさわしい誉め言葉であろう。しかし、別の角度から見ると、それは厄介な手続きを省略して、直接核心に迫る研究態度を意味することでもある。こういうリップマンを競争相手にもつことは、凡庸な研究者には大変不幸な結果をもたらすこ

とになる。偉大であるということだけのために、周囲に思いもかけぬ被害者が出るということである。

リップマンにとって丸山さんはいわば行きずりの人であった。その丸山さんが、ベルリンで行われた追悼シンポジウムで、そうそうたるお歴々を前にリップマンの生涯を語る役目を仰せつかることとなった。これはたまたまある機会に丸山さんが取材した会見記をリップマンが大変お気に召し、それがフレダ夫人の意向となって主催者に伝えられ、この仕儀となったのである。こういうところにも世間のしきたりにとらわれないリップマン(そしてそのリップマンを強力に支えた聡明なフレダ夫人)の面目が躍如としている。その時の膨大な準備が本書の基盤となった

本書の1つの特徴は、誰が最初の発見者であるかという優先権——それは研究者にとって、最高の勲章であるが——の問題に重点がおかれていることである。ATP 発見についての丸山さんの最終的判断は、ボストンの図書館員を説得して土曜日出勤させ、書庫にうもれた記録を徹底的に調べたというような、とてつもない努力の上に立っている。ATP の化学構造の決定が牧野堅博士によってなされたという国際的には知られていない事実も、それに匹敵する厳密な検証を経たものである

奇跡ともいふべきドイツ有機化学の火がリップマンなどによって米国へ伝えられ、生化学の黄金時代をつくったこの書を読んでもいただければ明らかのように、いま隆盛を極める分子生物学は本書の意味する生化学とはかなり異質のものである。「黄金時代」はリップマンの死とともに終わったのだろうか。(えばし・せつろう：岡崎国立共同研究機構生理学研究所長)